

## 詩への誘い<sup>いざな</sup>

校長 久保田範夫

次に掲げる近・現代の詩人を、生徒諸君は何人知っているだろうか。

…土井晩翠、石川啄木、萩原朔太郎、高村光太郎、宮沢賢治、草野心平（福島県出身）、石垣りん、伊東静雄、三好達治、中原中也、立原道造、吉野弘、谷川俊太郎、茨木のり子、長田弘（福島県出身）…私は高校時代に、萩原朔太郎、中原中也や宮沢賢治の詩に触れて以来、国語教師ということもあり、日本はもとよりヴェルレーヌ、ランボー、リルケ等々、多くの詩を読んできた。その中から、私が様々な場面での祝辞や挨拶、講話などの際に繰り返し紹介してきた詩を掲載する。若干の解説を付けたものもあるが、解釈すること自体に困難を覚えるものは無いはずなので、詩歌は苦手という人も、是非この機会に優れた詩を味わってほしい。

○「なぜ、私はここににいるのか。なぜ、ここににいるのが私なのか。」ふと自問し、明確な答えを見出せない時があるが、その答えを探し続けることが生きることなのかも知れない。そのような時、一つの手がかりとして読み返す詩の一つ。

或る位置 吉野弘

樹の位置——それは  
偶然が決めたものだろう。

樹高、幹周り、枝の張りかた——それは  
樹自身が決めたものだろう。

地上からは見えない根の  
緻密な土の抱きかたも。

或る位置に

同意したのではない。

同意するより先に、

浅い根はまず土を掴まねばならなかった。

その樹に私は尋ねる。

偶然が決めた君の位置を

君はどのように受け入れたか？

樹から答は返ってこない。

過ぎた歳月を

すべて樹形で語り

来歴の総量だけで立ち

それ以外を語らない樹。

（剛直で気むづかしい幹、しかし梢では

風や光と遊ぶ賑やかな葉のきらめき）

——反歌

枝を伸べ根を深めつつ己が位置うべないゆくや樹々の明け暮れ

（1983年刊『陽を浴びて』から、「吉野弘詩集」（ハルキ文庫）所収）

偶然を引き受け、種子が落ちたその場で生長する樹木。人が、ある家族の一員として生を受けるのも偶然。私たちはその偶然を強いられた宿命としてではなく、必要に変えなければならぬのだろう。人はそのための葛藤を経験するし、樹木もまた枝を伸ばし根を張りながら（観賞用の植木として変則的な成長を強いられる木もあるだろう）、ある歳月をかけて自分の位置をうづするための努力を重ねる明け暮れがある。

「過ぎた歳月を／すべて樹形で語り／来歴の総量だけで立ち／それ以外を語らない樹」、人間もこのように生きることができたらいいのに等、様々なことを考えさせてくれる詩。吉野 弘は、中学校の教科書に採られている「夕焼け」や混声・女声合唱組曲「心の四季」（みずすまし、雪の日に等）（高田三郎作曲）で親しんだ人も多いだろう。

〈1926（大正15）年1月16日～2014（平成26）年1月15日〉

## 真昼の星 吉野 弘

ひかえめな 素朴な星は  
真昼の空の 遙かな奥に  
きらめいている  
目立たぬように――

はにかみがちな 綺麗な心が  
ほのかな光を見せまいとして  
明るい日向を

歩むように――

かがやきを包もうとする星たちは  
真昼の空の 遙かな奥に  
きらめいている  
ひそやかに 静かに――

（合唱組曲「心の四季」の一つ）

○ 学校そのものを歌った詩歌は、意外なこと（？）にさほど多くないが、読むたびに勇気を奮い起こしてくれる女性詩人、茨木のり子さんへ大正15（1926）～平成18（2006）の詩を紹介する。

## 学校 あの不思議な場所

茨木のり子

校門をくぐりながら蛇蝎のごとく嫌ったところ  
飛びたつと  
森のようになつかしいところ  
今日もあまたの小さな森で  
水仙のような友情が生れ匂ったりしているだろう  
新しい葡萄酒のように  
なにかがごちやまぜに醗酵したりしているだろう  
飛びたつ者たち  
自由の小鳥になれ  
自由の猛禽になれ

（詩集『見えない配達夫』から）

最後の、自由の猛禽になれというところが茨木さんらしい表現だが、学校が仲間たちとの出会いと友情を育み、「なにかがごちゃまぜに醗酵したりして」、時間の経過とともに何かが生まれてくる場所、という学校の不思議さをよく捉えている詩。

以下、彼女の詩を解説なしで味わってください。

汲む ―Y・Yに―

茨木のり子

大人になるというのは

すれっからしになることだと

思い込んでいた少女の頃

立居振舞の美しい

発音の正確な

素敵な女のひとと会いました

そのひとは私の背のびを見すかしたように

なにげない話に言いました

初々しさが大切な

人に対しても世の中に対しても

人を人とも思わなくなったとき

墮落が始まるのね 墜ちてゆくのを

隠そうとしても 隠せなくなった人を何人も見ました

私はどきんとし

そして深く悟りました

大人になってもどきまぎしたっていいんだな

ぎこちない挨拶 醗く赤くなる

失語症 なめらかでないしぐさ

子供の悪態にさえ傷ついてしまう

頼りない生牡蠣のような感受性

それらを超える必要は少しもなかったのだな

年老いても咲きたての薔薇 柔らかく

外にむかってひらかれるのこそ難しい

あらゆる仕事

すべてのいい仕事の核には

震える弱いアンテナが隠されている きつと……

わたくしもかつてのあの人と同じくらいの年になりました

たちかえり

今もときどきその意味を

ひっそり汲むことがあるのです

(詩集『鎮魂歌』から)

六月

茨木のり子

どこかに美しい村はないか

一日の仕事の終りには一杯の黒麦酒

鍬を立てかけ 籠を置き

男も女も大きなジョッキをかたむける

どこかに美しい街はないか

食べられる実をつけた街路樹が

どこまでも続き すみれいろした夕暮れは

若者のやさしいさざめきで満ち満ちる

どこかに美しい人と人との力はないか

同じ時代をともに生きる

したしさとおかしさとそうして怒りが

鋭い力となって たちあらわれる

(詩集『見えない配達夫』から)

自分の感受性くらい

茨木のり子

ばさばさに乾いてゆく心を

ひとのせいにはするな

みずから水やりを怠っておいて

気難しくなってきたのを

友人にせいにはするな

しなやかさを失ったのはどちらなのか

苛立つのを

近親のせいにはするな

なにもかも下手だったのはわたくし

初心消えかかるのを

暮しのせいにはするな

そもそもが ひよわな志にすぎなかった

駄目なことの一切を

時代のせいにはするな

わずかに光る尊厳の放棄

自分の感受性くらい

自分で守れ

ばかものよ

(詩集『自分の感受性くらい』から)